

令和4年度（第28期）にいがた市民大学  
「日本の文化と季節の行事」公開講座  
「日本の絵の事」 実施概要

【会場】 新潟市民プラザ（新潟市中央区西堀通 6-866 NEXT21 6階）

【日時】 令和4年7月26日（火） 午後7時～9時

【講師】 美術評論家 大倉 宏

【参加者】 計104名 （内訳）・講座受講者 69名  
・一般参加者 35名

【内容】

「仏画、水墨画、絵巻物、浮世絵、油彩画—太古から現代まで絵の世界をいろいろな切り口で逍遙<sup>しょうよう</sup>します」というサブタイトルのもと、外国からの影響を受けながらも独自のスタイルを築いてきた、日本の絵の歴史や技法、表現について、多くの美しい画像を交えながらお話しいただきました。

古墳壁画の、自然の恵みを素朴に描いた絵は、仏教を始めとする中国文化の伝来により劇的に変化しました。極楽往生への切望から、阿弥陀来迎図や極楽浄土図などが盛んに描かれ、様々な表現方法を生み出したのです。その後、絵巻物、浮世絵、書画など、日本独自のスタイルが開花しました。数々の興味深い工夫も生まれました。一枚の絵の中に時間の異なる場面を描く「異時同図法」や、場面転換などに効果的に「雲」を用いる方法、「線」による表現などです。そして明治時代には、全くかけはなれた文化が西洋より入り、「線」が消え油彩が描かれるなど、再び大きな変化をもたらしました。

このように外来の画を受け入れながら、やがて日本人の目になじみ、あらたな変容をへて定着し、「日本の絵」となってきたとのことです。本講座では、その変遷と、多様で魅力に富む表現の工夫を非常にわかりやすい言葉で解説していただき、絵を鑑賞することの楽しさも学びました。

2時間という短い時間で太古から現代まで「日本の絵」を巡る旅、大倉先生に導かれ、まさに逍遙<sup>しょうよう</sup>した楽しいひとときでした。

